

機音が心地よい手機工房「はたむすび」。昭和の時代まで、ものづくりの現場にあふれていた人間らしい時間が流れている



TAKE ACTION
YOSANO BRANDING



うちのまち

vol.02

手織りには心が映る

「カシャン、トン。カシャン、トン」。
与謝野町後野のちりめん街道の外れに、
機を織る音が響いた。
木と木が奏でる優しい音は、降り積もる雪の中に消えていく。
「手機工房 はたむすび」の扉を開けると、
昔ながらの手織り機（高機）が5台、
電球の明かりに照らし出されていた。

8か月の研修期間を経て、
初めて織り上げたストール。
少しずつ安定して
織れるようになってきた

手機工房 はたむすび

「人間らしさが魅力」木製の織機再生

「織る人の息づかいが織りのリズムになる。だから人によって音が違う。同じ人でも、その日の心境によって微妙に変わるんです。それが手織り。自動織機では表現しにくい人間らしさが魅力ですね」。織物職人の松井英之さん(41)は手を止めて静かに語った。

工房ができたのは昨年6月末。京都・西陣織の紫紬の倉庫に分解された木製の手織り機があると聞き、ちりめん街道周辺の住民らが、織物工場跡で手織りを再生しようと動き出した。部材を縛ったひもをほどこぎ、くぎを使わず組み立てるのだが、水気を吸って組めなかったり部品が欠けていたりもしばしば。3台分の部材で1台を仕上げる状態だった。

工房には、軽度障害者の就労を支援するNPOみらいのメンバー 4人も技術の習得に通っている。松井さんや紫紬

の職人に指導を受けて半年が過ぎ、4人の織りは徐々に安定してきた。1月末からは商品の試作に入った。170センチあるストールを織り始め、2週間で4本が仕上がった。

赤と黒のストライプ模様。横糸を打ち込む力加減によって、微妙に風合いが変わる。丁寧に、時間を掛けて織ったストールはふっくらと空気を含み、首に巻くと肌を優しく包み込む。まずは

基本の柄をマスターすることが大事だが、同時に大きなミッションにも挑んでいる。人間国宝の能楽師、梅若玄祥さんのまとう能装束を織り上げることだ。わずか3センチの間に多彩な横糸を120本も通して幾何学的な模様を表現し、糸の密度を高めて生地のコシも出していく。松井さんは「高度な技への挑戦を織り手としての自信にしたい」と話す。

西陣で帯を織っていた松井さんは3

年前に与謝野町に移住した。織物に携わって20年だが、はたむすびで織り方を伝える経験はとても新鮮だ。「私が新人の時は『仕事は見て盗め』と言われた。職人の世界ですからね。でも今は、どうすれば早く技術が身につくか伝え方を考えている。教えているようで学んでいるんです。そんな温かなまなざしには、手織りの裾野を少しでも広げたいという思いが現れている。

はたむすびに通って8か月。中村剛さん(37)は織り上げたストールをいとおしそうに手にとった。「今まで味わったことのない達成感があります」。織機を見たこともなく、何の知識もないところからの出発だった。最初は糸がもつればかりで思うようにいかず「不甲斐ない毎日」だったという。だが、織りの仕組みが身につくと「カシャン、トン」のリズムが心地よくなった。食事も休

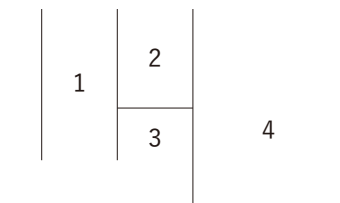
憩も忘れて夢中で織り、気がつけばもう終わりの時間。糸と無心で向き合うことに面白さを感じている。

中村さんは最近、日によって織りに微妙な違いがあるのに気づいた。「織り目に気持ちのたゆたいが見える。自分の内面を織っている気がするんです」。一人前の職人になるにはまだまだ長い年月が必要だが、一歩を踏み出した確かな手応えはある。一本一本打ち込まれていく横糸のように、糸を操る技術も少しずつ進歩を遂げている。

門外不出の技術があったからこそ発展を遂げた「ちりめんの里」だが、その技術を学べる場所は乏しく、職人の高齢化は進む一方だ。特に生産効率が低い手織りで後継者を育てるのは難しい。工房の前代表・柴田祐史さん(50)は「このままでは手織りは消える。日本の技術を守るために『開かれた工房』を創り、町ぐるみで後継者を育てたい」と語る。

手織りの教室は5月から試行する。プロの職人を目指す方ももちろん歓迎だ。当面はマフラーやストールが対象。問い合わせは、小室良太代表(080・5347・2955)へ。

織り目に気持ちのたゆたいが見える。
自分の内面を、織っている気がするんです。



- 1 路地にたたずむ「手機工房 はたむすび」
- 2 織物はまず糸繰りから。染めた糸を木枠に巻き直す
- 3 くだに巻かれた色とりどりの糸
- 4 手機に座り夢中で織る中村さん

希少な技 高まる価値

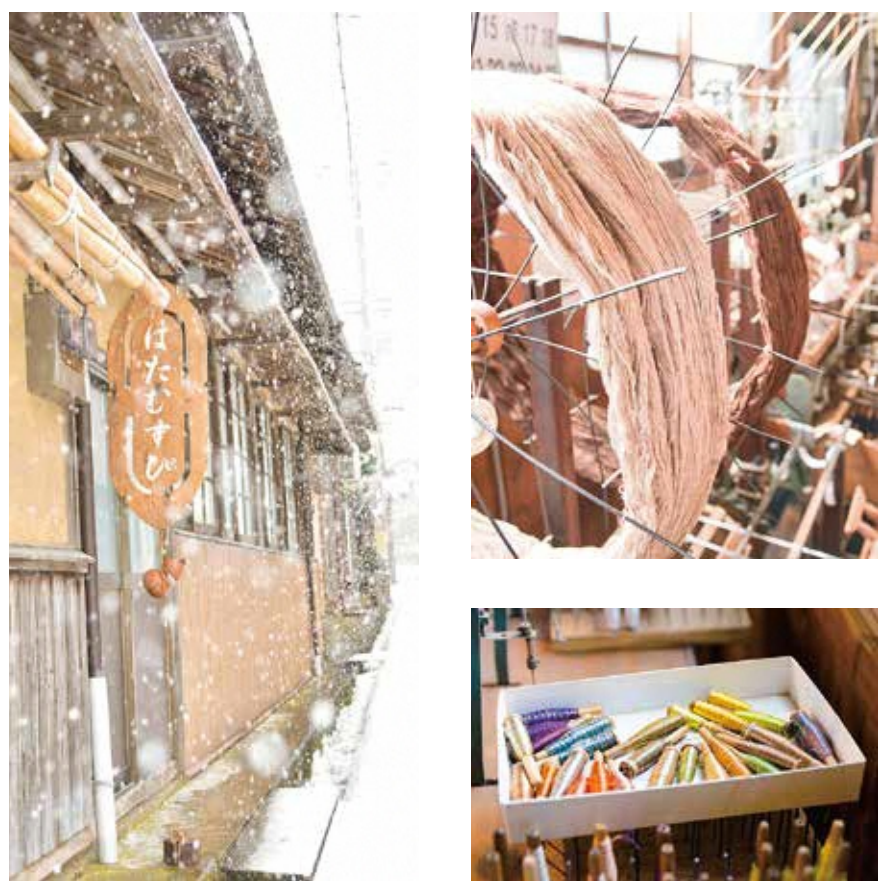
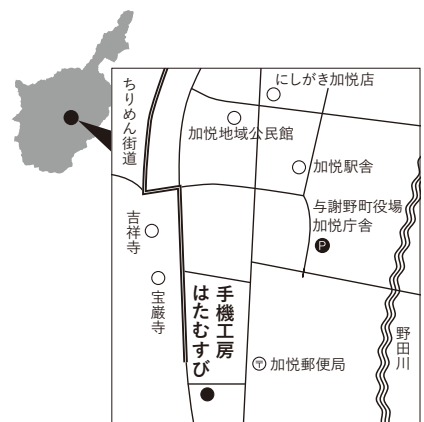
紫紬の4代目、野中明社長(65)は中国にも工場を構えている。シルクと若い労働力が確保しやすかったからだが、中国の経済も発展し、今では織り手の確保も難しくなりつつあるという。野中社長は「日本人が求める緻密な織りは、やはり日本人の方が得意だ。織物の原点は手織り。丹後を起点に原点回帰を図りたい」と話す。

安価な製品と差別化を図るには独自性も問われる。そこで注目したのが「手織り」。価格競争重視の時代を経て、再び手織りの可能性を呼び覚ますことが、はたむすびに関わる理由だ。手織りの織機は焼却処分した機屋が多く全国的にも希少だが、京丹後市内にある紫紬の倉庫には約30台の手

織り機が眠っていた。いわばビンテージな手織りの技術を復活させるチャンスなのだ。一方、紫紬には織物職人を目指す若手からの問い合わせもある。次世代に技術をつなぐためにも受け皿は必要だ。

機織りが「ガチャマン」と呼ばれた昭和40年代、ちりめん街道には織機の音が響き、織物にまつわる人々が行き交っていた。それから40年が過ぎたいま、機屋の数は1割ほどになった。地元でシルクのニット製品を作っている佐々木貴昭さん

(48)は「衰退の悪循環を止めるには人が集う場所が必要だ」と空き家の活用を呼びかけて回り、織物工場だった建物を貸してもらった。床に板を張り、おしゃれな照明を取り付けて、手織り機も組み上がった。織物が好きな人に技術を教え、世界で一つの商品を生み出す。そんな工房が、織物の裾野を広げることにつながればいい。佐々木さんは「織物の価値は時代とともに変わる。私たちが変化しながら、地域再生の手がかりを見つけ出したい」と話している。



あなたの絶景



ひさしぶりの青空 @坂根義隆さん

大雪すごかったですね。3日間降り続いて、雪かきもし続けて、やっとのぞいた青空。あの瞬間の喜びが思い起こされる1枚です。与謝野酒造の「京の豆っこ米」純米酒を贈らせていただきます。(編集部)



あなたの絶景募集! あなたの知っている与謝野町の「絶景」を教えてくださいませんか? 特に素敵なものは「うちのまち」や与謝野町公式SNSページに掲載させていただきます。次回のプレゼントは「手機工房 はたむすび」のストールです。応募はInstagram、Facebook、twitterのいずれかで、与謝野町公式IDをフォロー。それから写真にハッシュタグ「#与謝野町のまち」と「一言コメント」をつけて投稿すれば応募完了です。与謝野町公式IDへのリンクや、詳しい応募方法は右のQRコードからどうぞ。お問い合わせは、与謝野町商工観光課(0772・43・9012)へ。

